
六番めの善鬼

森野青果

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

六番めの善鬼

【Nコード】

N1464Z

【作者名】

森野青果

【あらすじ】

見た目は美少年だが、三百年ほど生きた老魔法使いのぼく。全盛期には王国を滅ぼしかけたけれど、さすがに最近は魔力の衰えを感じ始めている。長年連れ添った五匹の使鬼たち（見た目は美女・美少女揃い）も反抗的になってくる。そんなある日、使鬼たちを解き放たなければ、いよいよ命が危ないと告げられる。しかも彼女らは契約を解除されたたん、長年こき使われた恨みを晴らすため、ぼくに襲いかかるだろう。五匹とも使鬼としてのレベルは最強だ。そこでぼくは、六番めの使鬼と契約を結ぶことにした……

ザ・ザの小砂漠を半分わたったところで、月が二つあらわれた。ぼくはガルシアを止めて、斜め前方に起立する岩の上へ目をこらした。蜜蟻酒は好物だが、今夜は一滴も飲んでいない。なのに何度目をしばたかしても、月は二つあるようにしか見えなかった。

宮廷の博士どもがこれを見たら、世界の終わりだのアル・ル・タジール王国の破滅だのと、大騒ぎしたに違いない。

もつとよく見るために、ガルシアから下りて、さらに数歩あゆみ寄った。

風がぱたりと止んでおり、マントは少しもはためかない。空気は澄んでいて、星が瞬くさまがよくわかる。こんな夜なら、あのいやらしい砂蟹どもが這い寄ってきたとしても、気配でわかるだろう。ぼくだって、一晩かけて骨にされるのはごめんだ。

眺めているうちに、月の一つが瞬きした。

「円眼鬼か」

そんなことだろうと思った。どこの誰かは知らないが、趣味のよくない術者が放った使鬼ではないか。

もちろん円眼鬼がザコだというつもりはない。こいつを使いこなす術者は、かなり強力なミワの持ち主でなければならない。とはいうものの、

（趣味がよくないんだよね。古代語を使えば、スタイリッシュじゃないってことさ）

あんなごつごつした化け物と、自身のミワを同調させるやつのが知れない。

円眼鬼は筋肉隆々・フンドシー丁の巨人で、つるんとした頭部のてっぺんから、フィン族みたいな辮髪をたらし、鼻も口もない顔の

真ん中に、巨大な真円形の眼をそなえている。ばかでかい斧を所持しており、五マリートくらいの高さならば、一撃で打ち砕く。

（まったく、趣味がよくないんだよね）

溜め息をついた。

ちなみにぼくが命を狙われる理由なら、星の数ほどある。三百年ほど生きてきたが、悪行三昧の人生であった。もともと、最近はずがにミワの衰えを感じて、ずいぶんおとなしくしているが。全盛期には、アル・ル・タジール王国を滅亡寸前まで追いこんだこともある。

「トシはとりたくないものだ」

傲慢じゃないが、見た目は若い。花も恥らう紅顔の美少年。そのじつ、厚顔無恥な老魔法使いのだけど。

再び月が瞬いた。やれやれとつぶやきながら、ぼくは左手の指を伸ばし、手の甲を面前にかざした。五本の指には、それぞれ五色の石をあつらえた指輪が嵌まっている。親指から始めて、黄、赤、紫、青、緑……痛みを覚えたように、ぼくは眉をひそめた。

めまいがする。

いよいよミワが使鬼の靈力に、耐えきれなくなっている証拠だ。こんなことなら、剣術使いの護衛でも雇っておくべきだったが、筋肉隆々・フンドシー丁の刺客を前にして、今さら悔やんだところで始まらない。ぼくは右手の人さし指に中指を添えて、指輪の一つに触れた。刺すような痛みとともに、黄金色の火花が散った。

「アール・ミーム・ミール・ワーフ。偉大なる夜の支配者。暗黒の王の御名において、我は望み、我は求む。炎と血の精霊、サラマンドルの眷属。ミランダをここに召還せんことを」

指輪が灼熱し、閃光が弾けた。

紅蓮の炎が噴出し、中空で渦を巻いた。

炎はのたうちながら蛇と化し、トカゲと化し、やがてほっそりとした一人の女の姿を描いた。腰まで届く真紅の髪。額と首と左腕に巻かれた黄金の飾り輪。美しい体の線もあらわな赤いドレス。その

スリットから、ほっそりとした脚を覗かせている。

ミランダは左手を軽く腰にあて、右手に炎の剣を引っさげて、中空から青い瞳でぼくを見下ろした。

「あそこにいるの、円眼鬼でしょ。いやよ、わたし。フンドシ野郎の相手なんて」

ミワが弱まると、使鬼もやたらと反抗的になってこまる。全盛期にはずいぶんいたぶって、いや、可愛がってやったものなのに。

「余計な口をきくな。おまえは黙って命令に従えばいいんだ」

「あんたこそ、だれに向かって口をきいてるつもりなの、ピア樽」

「お仕置きされたいのか」

「ふん」

鼻で笑いやがった。ちなみにピア樽のことを、タジール公領の方言で「フォルスタッフ」と呼ぶ。これがすなわち、ぼくの名である。ミランダが剣を振り上げ、軽く振り下ろすと、刀身の炎がほとばしり、一匹の大蛇と化して突き進んだ。こちらへ向かって、だ。ぼくは素早く水冷の呪文を唱え、マントをひるがえした。

眉毛が少し焦げた。もう少し対応が遅れたら、美少年の丸焼きが湯気をたてていたところだ。

「殺す気か！」

と叫んだものの、我ながら愚問だった。今の一撃は勢いこそ弱かったが、完全にぼくをロックオンしていた。要するに、殺る気満々。さてこうなると厄介だ。今夜の彼女はことさら機嫌がわるいし、ぼくのミワも予想以上に弱まっている。ミワが弱まれば、使鬼を束縛する力も減少する。大魔法使いだなんてうそぶいているが、しょせんは生身の体。使鬼とタイマン張ったところで、勝ち目なんかあるわけがない。

（ヘレナを呼び出すか……）

薬指に嵌まっている青い指輪を横目で眺めた。

五匹の中では最も温厚なヘレナだが、血も涙もない悪鬼であることに変わりはない。ミワによって拘束されていればこそ、命令を聞くわけで、こんな状態で呼び出せば、ミランダとタッグを組んで襲ってくる可能性が高い。いや、ぜったいに襲ってくる。

そんなぼくの窮地を救ったのは、意外にも円眼鬼だった。

「後ろだ、ミランダ！」

三マリートはゆうに越える巨体が大斧を振り上げ、図体からは信じがたい素早さで、彼女の背後にせまっていた。真円形の一つ目が、呪われた鏡のようにぎらぎらと輝いた。

「言われなくなつて！」

彼女は振り返りざま、炎の剣をひと薙ぎした。閃光が巨人の胴を直撃した。爆音とともに炎が渦を巻き、円眼鬼はおぞましい悲鳴を上げながら、後方に吹き飛ばされた。そのまま背中中で巨岩に突っ込み、ばらばらに打ち砕いた。

澄みきつた夜空の下、ミランダは踊るように身をひるがえした。赤く発光する髪がなびき、緋色のドレスから、白い脚があらわになった。生意気なやつだし、さっきは殺されかけたが、じつに美しい使鬼というものは、こうでなくてはいけない。

「仕留めたか」

「冗談でしょう。相手が何だと思つてるの？ そんなことも感知できなくなつたんじゃ、あんたもそろそろおしまいね、フォルスタツフ」

「ご主人さまだろう！」

痴話喧嘩している間に、崩れた大岩の塊が四方へ弾け飛んだ。ラマ王の彫像のように円眼鬼が立ち上がり、雄叫びを上げた。さっきの一撃で腹がざくりと裂け、傷口から蒼い炎が吹き出していた。片手で斧を引きずりながら、よろよろと歩き、一つ目に憎悪をみなぎらせた。

ミランダの瞳に、世にも高慢な侮蔑の色が宿るのを見た。使鬼は飼い主に似るというコトワザは、あながち嘘ではない。彼女は優雅に腕を振り上げ、片膝を立てた。いにしえの女神像をおもわせる、「終撃」の構え。

野獣の咆哮にも似た雄叫びを上げながら、円眼鬼は地を蹴つて駆けだし、宙に踊り上がった。見る間に距離が縮まったが、ミランダは微動だにしない。巨人は背後になびいた大斧を片手で引き寄せるようにして、水平に切りつけた。

血の色をした炎が、夜空で弾けた。

次の瞬間、炎に包まれた円眼鬼の上半身が、くると回りがらはるか彼方へ飛んで行くのを見た。残りの半分がどうなったか、知るよしもない。ひとつだけわかっているのは、円眼鬼を送りこんだ術者が、今ごろ苦しみのたうちながら、あの世への旅路を急いでいるだろうこと。

使鬼の敗北は、即座に術者の死を意味する。相手を抹殺するためを送りこんだ力が、すべて自身に跳ね返ってくるからだ。

月は一つになっていた。さっきより数倍に膨らんだように思える、巨大な満月。その前にたたずんで、ミランダはぼくを見下ろしたまま、赤い唇にすさまじい笑みを浮べた。

「思い知らせてあげましょうか、フォルスタッフ。どちらがご主人さまなのか」

1 (1)

1

ル・ビヨン。首都アル・ブリスに次ぐ、王国第二の都市。

荒野に横たわる双子の竜、ロム川とレム川が街の中で合流し、また二つに分かれてゆく。痩せて神経質な姉妹。氾濫をくり返すお転婆な竜たちも、絡みあうことで力が相殺され、広く穏やかな流れと化している。

その豊富で清らかな水を利用して、広大なオアシス都市が築かれている。王国が誕生する以前から街として栄え、またかつて、ここに百年にわたって大宮司が幽閉されていたことで知られる。そのせいか、神社仏閣が非情に多く、なぜか魔術師が好んで住みたがる。ル・ビヨンの場末といえ、カンテラ通りが南で尽きるあたり。

ズ・シ横丁と呼ばれ、じめじめした土地に蜘蛛の巣のような路地が入り組み、あやしげな貧民、遊び人、悪人どもが巢食っている。この騒がしいスラム街をぼくは気に入る、ここ五年ばかり、ねぐらにしている。近所の連中はぼくのことを、ただのインチキ占い師と認識しているようだが。

「よお、フォルスタツフ。今夜はまた、いつそう冴えない顔をしているな」

青猫亭に入ると、ヒゲ達磨の亭主が目ざとく見つけてそう言った。

「悩み事があるんなら、占ってやろうか、先生」

店にひしめく酔客たちが、どっと笑う。ぼくは眉をひそめ、無言で隅のテーブルをめざした。硬い椅子に腰をおろしたとたん、背骨が引き裂かれるような痛みにみまわれた。

(くっ……！)

昨夜はあやうく死にかけた。

さいわいミランダは円眼鬼との戦闘で、彼女の思惑以上に力を使

つていたため、どうにかこうにか、指輪に押し籠めることができたのだが。おかげでぼくは、一日じゅうベッドから起き上がれず、夜になってようやくねぐらを這い出し、腹を空かしてズ・シ横丁をさまよい歩く恰好。

「ほんとうに、だいじょうぶなんですか」

酒壺と料理を手には、ロザリオが近づいてきた。三つ編みにした、燃えるような赤毛を見て、ぼくは痛みを思い出したような顔をしたに違いない。もっともロザリオはミランダの五百倍温厚で、慎み深い。あのヒゲ達磨から、こんな娘が生まれたこと自体、奇跡といえた。

ぼくが飲み食いするものはいつも同じなので、注文なしで運び込まれる。常に特上の酒をたのみ、払いもいいので、だいたいこの時間には、ぼくのために隅の席が空けてある。

「ごめんなさいね。父はああ見えても、フォルスタツフさんのこと、気にかけているんですよ。ここ最近、ずっとつらそうに見えるってわたしも、とても心配です」

ヒゲ達磨が気にしているのは、ぼくの財布のほうだろう。そう思ったが、もちろん口にしなかった。

「ありがとう。きみの顔を見たら元気が出たよ」

齒の浮くようなセリフを言うと、ロザリオは花が咲いたように、頬を赤らめた。

この娘を陥落させるのはた易い。奴隷にしてみたい気がしないでもないが、それではここに来る楽しみがなくなってしまう。五十年前なら、迷わず鎖で引き回す楽しみを選んだのだが。純真なまま眺めていたいというのは、まさに親爺趣味。ぼくもトシをとった証拠であろう。

ロザリオが立ち去ると、ぼくは切子硝子の容器に酒を注ぎ、パンをちぎって煮豆のスープにひたした。食えないことはないけれど、基本的に肉は食わない。美酒と粗食が、ぼく流の長生きの秘訣である。一人で静かに食事する習慣を知っているので、ガラのおかげ

常連客たちも、この席には近づかない。

ぼくの食事を邪魔だてしたヨソ者が痛いめにあう場面を、何度も目の当たりにしているからだ。

食事を終わるとロザリオが空の器を下げ、薔薇茶を置いていった。一口飲んだところで、テーブルの上に影がさした。

見上げると、つぎはぎだらけの防水布で全身を覆った人物が、ぬっと立っていた。こちらのほうが影法師みたいだった。長身で針のように痩せていた。フードの中の顔は濃い影がべったりと貼りついているため、よくわからない。ただ鋭い眼光と、食み出した蓬髪だけが、影の中にいちじるしかった。

ぼくが驚いたのは、この男がまったく気配を感じさせず、ここまです近づいたことだ。

「ほかに席がなかったんでね。ここ、空いてるかね」

目の前の椅子を指さして、男はかすかに笑ったようだ。あれほど騒がしかった酒場は、一瞬で静まり返り、まわりの連中が、固唾を呑んで見守っているのがわかった。男を睨みつけたまま、ぼくは答えた。

「もちろん」

「ならば、座らせてもらつよ。ずいぶん長いこと歩いてきたものでね」

1 (2)

男の声に聞き覚えがあることに、ぼくはとつくに気づいていた。だがどうしても思い出せない。自慢じゃないが、記憶力はあまりよいほうではない。

自分で言ったとおり、この男が旅を続けてきたことは、間違いないだろう。腰かけるときに、荒野のにおいと、血のにおいが少しした。相変わらずフードを取らぬまま、ミイラのように防水布を巻いた指を、テーブルの上で組み合わせた。なんとという眼光だろう。このぼくが、生身の人間に恐れを感じるなんて。

「あの……」

胸に盆を抱いた姿勢で、ロザリオは蒼ざめていた。ぼくは彼女にウインクしてみせた。びつしより冷や汗をかいていても、カッコだけはつけたい。

「いいんだよ。ぼくと同じものをお出しして。それとも、肉がよろしかったでしょうか」

「いや、同じものでけっこうだよ。フォルスタッフさん」
ボロ布を巻いた片手をあげた。ロザリオが逃げるように立ち去ると、常連たちはホッとしたような、がっかりしたような溜め息をもらして、それぞれの雑談に戻っていった。なんだ知り合いか、といったところだろう。

男はたしかに、ぼくの名を「フォルスタッフ」と呼んだ。

「何年ぶりでしょうか」

カマをかけてみた。酒と料理が運ばれ、心配顔のロザリオが再び立ち去るまで、男は無言で指を組み合わせていた。砂漠のような声で、男は答えた。

「およそ百三十年ぶりかな。昔の話だ。忘れてしまうのも、無理はない」

男は酒壺の栓を開け、そのまま口をつけて傾けた。本当にミイラ

ではないかと疑いかけていたが、一応飲み食いするらしい。百三十年前といえば、ぼくが最も羽振りのよかった時代だ。

魔軍を率い、当時のタジール公と手を結んで、強大な王国軍を次々と蹴散らしていった。王宮を包囲して五十日後、あることがきっかけで、突然気が変わるまで。

（ここに至って包囲を解くというのか。愚かな。もし汝がそれを欲するなら、我は汝のもとを離れ、必ず汝を滅ぼすであろう）

あのときの、憎悪に燃えるヴィオラの顔が、目に浮かぶようだ。紫の指輪に封印されている、五匹の中でも最強の力をもつ使鬼。ついに彼女は反乱を断念したが、ぼくもまたあれ以来、一度もヴィオラを呼び出していない。右手の中指に嵌められた紫のリングは、いわば「開かずの指輪」と化していた。

「思い出したかね」

「いや」

なぜ男を思い出そうとして、ヴィオラの姿が浮かんだのだろう。

乾いた笑い声をもらすと、男は両手を上げてフードにかけた。ゆっくりと後ろにずらされた黒頭巾の中から、まず白い蓬髪がばさばさと食み出した。面長な、これ以上ないほど痩せた顔。白い苔のような無精ひげ。尖った鼻と険しい眉間。幾筋もの傷が走る蒼黒い顔の中で、目だけが鉱物のように輝いていた。

「ダーゲルド……！」

声が震えた。ダーゲルド・オーシノウ。かつてのぼくの師であり、敵でもあった男。百三十年前に死んだとばかり思っていたのに……そう、彼女によって、かれは殺されたのではなかったか。もとはダーゲルドの使鬼であった、ヴィオラによって。

ダーゲルドのもとで、ヴィオラはシザリオと呼ばれていた。少年の扮装をして、戦闘時にのみ呼び出されるのではなく、平時もかれの召使のように仕えていた。

「生きていたのですか？」

むろん、目の前の男が幽鬼でも生ける屍でもないことは、わかっ

ている。他人の空似でもない。かつての洒落者が、ボロ屑のようにやつれ果ててはいるが、こんな目をした男が、二人という筈がない。そうしてかれがダーゲルドに違いないことは、次の一言で明らかになった。

「シザーリオは元気かね」

「あいにくと。あれから一度も呼び出していませんよ」

「だが、近いうちに、いやでも顔を合わせねばならんだろう」

「何が言いたいんです？」

かれは答えず、また酒壺を傾けた。煮豆のスープはまったく手がつけられないまま、テーブルの上ですっかり冷めていた。あらかた空になった壺を置き、指で口をぬぐった。ボロ布にどす黒い血がにじむのを、ぼくは見逃さなかった。

2（1）

2

ヴィオラを紫の指輪に封印してしまってから、ぼくは彼女の夢を頻繁に見た。

夢の中の彼女は、必ずしもぼくを責めてはいなかった。けれどもそれは、ぼくの願望に過ぎなかったのかもしれない。

（まだぼくを憎んでいるのか）

（我に汝を憎む理由はない）

（ミワから解き放たれないのか。自由になりたくないのか）

（自由など、しょせん幻想に過ぎぬ。人は鳥の翼に憧れるが、鳥は翼を得たばかりに、休む間もなく世界じゅうをさまよう宿命を、背負わねばならなかった）

（まだダーゲルドを愛しているのか）

（……）

（だからぼくを、許すつもりはないのだろう。答えてくれ、ヴィオラ）

（我は使鬼なるぞ。それが答えだ）

かれが席を立つ気配で、ようやく我に返った。

「どこへ？」

「少し外が見たい。この街は、久しぶりだ」

二人ぶんの勘定を払い、青猫亭を出ると、ダーゲルドは店の前にたたずんでいた。フードつきのマントが、重々しい影を引きずっていた。

人は死期が近づくと影が薄くなるというが、魔術師の場合は、その逆であるらしい。影の存在がだんだん強くなり、ついにはそいつに吞まれてしまう。人の道に外れた技。神というのか何というのか知らないが、光り輝く存在に背を向け、ひたすら闇の力に頼ってき

た、その報いなのだろう。

ぼくもまた、近頃では明るい月夜など、自身の影を見てぎよっとすることがあった。そいつは見知らぬ生きもののように、いつかぼくというクビキを逃れて、復讐を果たす日を虎視眈々と狙っているのだった。五匹の使鬼たちの意志を、代弁するかのように。

「ほお、ブリキの自走夜警が、まだいるんだな」

いつしか、かれと肩を並べて、淋しい通りを歩いていった。

両側の貧家の窓から、頼りない灯りが洩れているばかりだが、欠けはじめた月の影が落ちて、街路を蒼白く浮かび上がらせていた。かん、からん、と、うつろな音を響かせながら、不恰好な影が近づいて来た。ダーゲルドは、この影のことを言ったのだ。

それは古めかしい夜警の制服を着せられた、ブリキのゴーレムだった。中に機械仕掛けもなければ、人が入っているわけでもない。まったくのうつろだという。むかし、幽閉されていた大宮司を監視するために、何十体も作られ、強力な魔法によって動いていたという。

「たまに見かけますね。もはや幽霊を見たほどにも、気にかける住人はいませんよ。どこから来てどこへ行くのか。日が落ちると同時に、ふらふらとさまよい出て、クロツク鳥が鳴く頃には、いつのまにか消えちまいます」

かん、からん。

やや前屈みの姿勢で、自走夜警はぼくたちとすれ違い、右に左によろめきながら、街路の角を曲がって消えた。

ぼくたちはどんどん街外れまで歩き、丘をのぼる小道にさしかかった。月が丘を照らし、奇妙な巨獣のように見せていた。実際に、かつてこの丘には、びっしりと牙の生えた口で常にニヤニヤ笑っている巨獣が棲み、人をさらって食っていたとか。今では頂上に、古代神殿の廃墟が残るばかりである。

倒れた石柱に、ダーゲルドは腰をおろした。いかにも疲れきったかれは、今にも自身のマントに押しつぶされそうだった。ぼくは突

つ立ったまま、月とダーゲルドと向き合う恰好。

「長生きなんか、するもんじゃない。生命力の強さか、それとも悪運というやつか。いずれにせよ、老醜をさらす恰好となった」

「あなたのミワは、まだ充分強力ですよ」

「気休めはいい。おのれのミワのことは、おのれが一番よくわかっている。指輪をすべて抜き取っても、このザマだからな。シザリーオが封印されたままでよかったよ、フォルスタッフ。彼女には……」

こんな姿を見せたくなかった。

という言葉を、きつとかれは飲み込んだに違いない。

2(2)

「ときにフォルスタッフ、わたしの心配なら、よそでしてくれて構わないが、おまえ自身はどうなのだ？　どこまで理解している？」
「知らずに肩が震えた。やはりダーゲルドは、そのことを告げるために、はるばる荒地をわたってきたのだ。とつくの昔に死んだはずの男が。黒いフードつきのマントを身につけた、骸骨のようは風貌で。」

月が痛いほど冴えていた。

不眠症の町、ズ・シ横丁の喧騒も、ここまでは届かない。神殿の下に埋められているという、長い耳の巨獣が、含み笑いする気配まで感じられるようだ。

「昨夜は、火のじやじや馬に食われかけましたよ。円眼鬼を屠ったばかりの彼女に、です」

「おまえが悪態をついている娘に、せいぜい感謝することだ」

ミランダが、手加減してくれたというのか。円眼鬼の先制攻撃をぼくが指摘した、その借りを返したつもりか。

「だが次こそは、その減らず口ごと消し飛んでしまおうと考えたほうがいい。長年の不摂生の報いだよ、フォルスタッフ。おまえのミワは、もはや一匹の悪鬼の霊力にすら耐えられない」

溜め息がもれた。おのれのミワのことは、おのれが一番わかっている。ダーゲルドはそう言ったが、ぼくもまた心の奥底では、そのことを充分理解していたのだと思う。ただ認めたくなかっただけで「次に使鬼を呼び出したときが、ぼくの最期だと？」

「そういうことだ」

「ヘレナでもだめですか」

「何とも言えないな。場合によってはシザーリオ……ヴィオラがおまえを見逃すかもしれない……ああ、いや。それはあり得ないか」
あり得ないと、ぼくも思う。

（我は使鬼なるぞ）

それが答えだと言ったとおり、彼女は使鬼の「掟」に忠実に従うだろう。ミワから解放された使鬼は、元の主人と対決しなければならぬ。彼女たちが霊力というエナジーの塊である以上、クビキを解かれた後の反動は自然な流れであり、算術博士どもが言うところの、「法則」に過ぎないのだから。

だからと言って、むりに彼女たちを引き留めようとすればするほど、事態は悪化の一途をたどるだろう。反動が膨れるだけ膨れ上がり、共鳴作用がはたらいて、やがては五匹とも封印を突き破り、同時に襲いかかってくるだろう。

一匹ずつでも打つ手がないというのに、こうなってはお手上げだ。もはや恥も外聞もなかった。かつての敵の前に、ぼくはすぎるように、ひざまずいた。

「どうすればよいのですか」

口の端を引きつらせて、ダーゲルドは笑ったようだ。

「そこまで生に執着するのか。三百年も生きれば、もう充分ではないか」

「充分ですよ。やりたいことは全てやったし、思い残すことは何もない。彼女たちが望むなら、八つ裂きにされても構わない。ただ、たとえ憎まれていようと、彼女たちは長年、ともに死線をくぐり抜けてきた相棒です。別れなければならぬ宿命は受け入れますが、別れたあとも、無駄口くらは叩き合いたい」

「おまえの言いぶんは矛盾だらけだぞ、フォルスタッフ」

「何百年生きようと、人間の感情なんて、しょせん矛盾だらけですよ。とにかくぼくは、こんな別れかたは気に入らないんです」

かん、からん。

自走夜警の足音が聞こえた気がしたが、むろん空耳だろう。

ダーゲルドは足もとをまさぐり、夜露に濡れた草むらから、一輪の、野生の薔薇を手折った。蒼ざめた月光にかざされると、薔薇の花弁は血の色に燃え上がった。使鬼を失ってもなお、かれのミワが

まだ充分、力を保っていることが知れた。

「ひとつだけ方法がある」

燃える花弁を一枚むしり、かれは宙に放った。それは一匹の赤い蝶と化して、月を愛でるフェリアス族のように、ひらひらと優雅な舞を演じた。ぼくは無言でそれを見つめたまま、ダーゲルドが言葉を継ぐのを待っていた。

「第六の使鬼とミワを結ぶことだ。ただし、これまでのように悪鬼ではなく、善鬼とな」

2 (3)

ぼくたち魔術師にとっての善鬼とは、一般人にとっての悪魔に等しい。

神というのは何というのかわからないが、そういったものの眷属であり、闇ではなく、光の世界に属する霊的なエナジーだ。例えば暗闇を這いまわる黒翅虫に、むりやり日光浴させれば、ひとたまりもないように、ぼくたちは光の眷属をこの上なく忌み嫌っている。

「冗談でしょう。いや、まったく冗談じゃない」

「そうとも。わたしは本気で言っている」

「不可能ですよ。百歩譲ってあなたが本気だとしても、善鬼なんかとミワが結べるわけがない。蠟燭にバケツの水をぶっかけるようなものです。そもそも善鬼ともあるうものが、ヨコシマな魔術師を成敗こそすれ、味方につくとお思いか？ ぼくだって、三百年ほど生きていますがね、そんな話は一度も聞いたためしがありませんよ」

「そうだろう。わたしも聞いたためしがない」

呆れて二の句が継げなかった。

この男、こんなくだらない冗談が言いたくて、病身に鞭打ち、はるばる荒野をわたってきたのだろうか。ぼくのミワの衰えを嘲笑い、かつてぼくに敗れた恨みを晴らそうというのか。おまえはもうおしまいだよ、ピア樽野郎。せいぜいお祈りでもしておくんだな、と。

(ヘレナを呼び出してやる)

心の中で歯ぎしりしながら、そう考えた。彼女なら、まだぼくに従うかもしれない。使鬼を持たないダーゲルドなど、見世物小屋の魔術師にも劣る。この場で即座に八つ裂きにして、老醜にピリオドを打たせてやる。

あの強くて美しかったダーゲルド。憧れの魔術師の名を、これ以上穢さないためにも。

「ただし、秘法として伝わる以外は、な」

ばくの癰癤が爆発する直前に、かれは口を開いた。

「秘法……ですか」

「いわゆる、口伝だよ。書き残すことをかたく戒めらておるゆえ、どんな魔法書にも載っておらぬ。師から弟子へと、ただ口頭でのみ伝えられてゆく、いわば裏技中の裏技だな」

「かつてあなたは、ばくに伝えるべきことはすべて伝えたと、そう仰いませんでしたか」

燃える薔薇を見つめたまま、ダーゲルドは口の端をゆがめた。

「言った。あの頃のおまえに、この秘法は必要なかったし、わたしにもまた、伝える資格がなかったからな。だが今ではおまえのミワは衰え、わたしは死に瀕している。お互いに、その時期が来たのさ。それだけの話だ」

魔法は生きものだ。

かつてかれに、そう教えられた。術者が術を選ぶのではなく、術が術者を選ぶのだ。そうして今回の場合みたく、どうあがいても、その時期が来るまで習得できない魔法がある……ダーゲルドは語を継いだ。

「むろん、リスクをとまってこそその裏技だ。へたをすれば即座に死に至る。が、いずれにしても待つものが死であるのなら、運命に對して能う限りの抵抗をこころみたい。フォルスタッフ、おまえならきつとそう考えるだろう。違うかね？」

無言で首をふった。ダーゲルドは花弁から目を離し、ばくをまともに見据えた。ほとんど色素を失った瞳は、けれど月に凍る鏡湖のように、相変わらず研ぎ澄まされていた。戦慄の中で、ばくはつぶやいた。

「教えてください。その秘法というやつを」

秘法と呼ばれるものの九割九分九厘は、贗ものであるといわれる。インチキ魔術師がシロウトの金持ち相手に法外な値段で売りつける、今も昔もかわらない商売の道具とされる。それらはやたらに煩雑な儀式をともない、呪文は本に綴じられるほど長たらしく、一角獣の

角だのと海竜のヒゲだのと、入手困難な祭具を要求する。

要するにまったく効かないのだが、ダーゲルドの口伝は違っていた。かれががすべて語り終えたあとも、月はまだ中天にかかっていた。本物の秘法とは、それほどシンプルなものだ。

一輪の薔薇は手折られた記憶すら忘れたように、雑草の中でみずみずしく咲いていた。ただ赤い蝶ばかりが、月を装飾するように、ひらひらと飛んでいた。

ダーゲルドの姿はどこにもなかった。

3 (1)

3

自分の身は自分で守れ。守れそうにないときは、用心棒を雇うに限る。

自慢ではないが、三百年の間、悪の限りを尽くしてきたぼくには、敵が多い。おまけにこの首には、莫大な懸賞金までかけられているため、命知らずの賞金稼ぎどもに、常につけ狙われている。そして使鬼が使えない魔法使いは、剣を奪われた剣術使いに等しい。

むろん、使鬼を呼び出さなくても、多少の攻撃は可能だ。

火を起こし、水を噴出させ、風をあやつる。自然界に直接作用する呪文があるし、また人形をこしらえて、下等な精霊をのり移らせ、インスタントな使鬼をでっち上げる方法もある。並みの相手なら、この程度の術でも倒せるのだが、円眼鬼クラスの強力な使鬼を差し向けられては、とても太刀打ちできない。

(やはり、あいつに頼むしかないか……)

古来、魔術師は剣術使いとコンビを組む場合が多い。

攻撃力は魔術師のほうがはるかに勝っているが、例えば呪文を唱えている最中など、まったくの無防備になってしまう。またしよせん生身の体であるため、接近戦に持ちこまれては不利だ。そこで鍛えぬかれた剣術使いとコンビを組むことで、それらの欠点をカバーするのである。

三百年の間に、ぼくは何十人もの剣術使いと知り合った。かれらは当然、魔術師のように寿命が長くない。肉体の衰えは死を意味するので、むしろ一般人より短いくらいだろう。ズ・シ横丁に引っ込んでからは、かれらとのつき合いも完全に絶えた。

ただ一人だけ、「こいつは」と目をつけている剣術使いが、この界限に住んでいるのだが。

(客?)

戸を叩く音で、もの思いから覚めた。

まさに日が暮れようとしていた。鎧戸の隙間から洩れる光は、弱々しい赤で、かわりに室内の灯火が、ようやく居場所を得たように、鮮やかに色づいてゆく。身を起こすと、寝台が頼りなくきしんだ。骨がばらばらになりそうな激痛に見舞われた。

「くっ……！」

使鬼の呪いだ。

五匹の使鬼どもが、内側からぼくのミワを突き破ろうとあがいているのだ。しかも単なる悪あがきではなく、確実にぼくの体を蝕んでゆく。彼女たちはそのことを充分理解しており、嗜虐的にほくそ笑むさまが目につかぶようだ。さんざんぼくにいたぶられてきた仕返しに。

あれから三日経ったが、ダーゲルド・オーシノウの行方は杳として知れなかった。人形を使って探索させたが、少なくともこのズ・シ横丁にはどこにもいない。ならばやはり幽鬼か、幻の類いかと考えてみたものの、青猫亭の連中は、たしかにかれを見ているのだから、ぼく一人の妄想では決してない。

そうしてダーゲルドの「秘法」は、夜露とともに消え去ることなく、はつきりと記憶に刻まれていた。

煩雑な儀式もいらないければ、サラマンドルの涙だとか海兔の牙などが必要なわけでもない。召喚の呪文も簡単に覚えた。あとは、ある場所へ行つてミワを結べば済むだけの話だ。が、しかし、ぼくはこの三日間、骨の痛みに耐えながら、どうしてもそこへ赴くことができずにいた。

恐ろしいのだ。

善鬼が、光の精霊が、恐ろしいのだ。ぼくをばらばらにしようと目くろむ闇の精霊、五匹の悪鬼たち以上に。

また戸が叩かれた。

まったくこんな朝っぱらから、ではなく、日が落ちる前から魔術

師の玄関を叩くなんて、無作法にも程がある。髪を掻きむしりながら寝台から抜け出すと、靴を履き、マントを羽織って、楕円形の鏡の前に立った。目の前で蒼ざめた美少年が、眉間に皺を寄せていた（こんな顔ばかりしていると、たちまち老けこんでしまいそうだ）呪文を唱えると、ぼくの顔はしだいに滲み、灰色に曇る鏡面に溶けこむようにして消えた。振り子が五往復もする間に、再び鏡は像を結び始めるだろう。それは檜の戸板に象嵌された「眼」をとおして映し出される、扉の外の映像なのだ。

刺客ではなかった。

鏡の中で、頬を上気させたロザリオが、不安げな瞬きをくり返していた。夕陽を背景に、赤く染まったお下げ髪が乱れているさままで、はつきりと映っていた。

3 (2)

どうしてもロザリオの姿はミランダを髣髴させる。

とくに顔立ちがそっくりなわけではないが、総体がなんとなく似ているのだ。女にしては大柄で、豊かな乳房をもち、長い髪は燃えるように赤い。性格が正反対であることが、かえって肉体の類似を引き立てるようだ。

ぼくが日が暮れるまで起きてこないことくらい、彼女は知っているはずだ。それでも髪を振り乱して戸を叩くのだから、まず、面倒ごととみて間違いあるまい。ほかならぬロザリオでなければ、水をぶっかけて追い返すところだが。

「ごめんなさい、フォルスタッフさん」

戸を開けたとたん、彼女は力が抜けたように、その場にひざまずいた。本来なら蒼ざめているであろう類は、走ってきたたせいで、薔薇色に燃えていた。汗にまみれ、いつもつつましくかな着こなしの服が、しどけなく乱れていた。

多少の面倒ごとなら、亭主のヒゲ達磨みずから撃退するだろう。また常連には腕の立つやつが少なくないので、お礼のタダ酒を目当てに、喜んで手を貸すはずだ。ぼくが知る限り、これまでぼく以上の「面倒ごと」が、青猫亭をおとずれたことはなかった。

「いいんだよ。どんなやつ？」

身をかがめ、ロザリオの肩に手をおくと、小鳥のように震えている。とはいえ、ぼくよりひと回りほど、彼女のほうが大きいのだが。

「低地人です」

「このあたりの低地人といえば、ユゴラ族かな」

「ええ。五人も押しかけてきて……」

低地人は主に湿地帯に棲息する、半人半鬼のエルフ族だ。きつちり分類できない部分もあるが、おおむね半人半鬼は、明るいエルフと暗いエルフに分けられる。低地人はむろん暗いほうに属し、緑色

の皮膚は両棲類のそれに似て、通常、頭に二、三本の角が生えている。

ユゴラ族は、半ば水没したまま放棄された街区に巢食っていた。性質は粗暴で気が荒く、一般都市民がすっかりかれらの居住区へ迷いこもつものなら、二度と日の目を見ないと言われていた。ただ、かれらはめつたに縄張りの外には出ないので、これまで都市民との悶着は、さほど多くは起こらなかった。

だから、青猫亭にかれらが押しかけてくるなんて、極めて異常なできごとといえた。

（たしかに、面倒だな）

半分は魔物なのだから、当然かれらの身体能力は生身の人間の比ではない。尻に火をつけられた程度で、泡を食って逃げ出すとは思えない。やはり、使鬼を用いるしかないだろうか。そうして対エルフ戦にうつてつけの使鬼といえば、ジェシカを置いてほかにない。

ジェシカはぼくの親指に嵌まっている、黄色い指輪に封印されていた。怪力の持ち主で、肉弾戦に威力を発揮する。ことにユゴラ族のような、ばか力だけが自慢の半鬼を相手にするには、うつてつけだ。間違つてミランダなんか差し向けた日には、店ごと丸焼きにされるだろうから。

ただ……

ロザリオの手を引いて、曲がりくねった路地を急ぎながら、ぼくは眉をひそめた。

ヘレナほどではないにせよ、ジェシカもまあ、扱いやすいほうである。ざつくばらんでノーテンキ。まさに、神経質で苛酷なヴィオラを、逆さにしたような性格だが、常に冷静なヴィオラと違い、感情が爆発すると手がつけられなくなる。ユゴラ族の連中が彼女によつて店の外に放り出されたら、お次はぼくが、川にぶち込まれる番だろう。

いや、ぶち込まれる程度では済むまい。現在のぼくのミワには、彼女の暴走を封じ込める余力などないのだから。

家一件ぶんの空き地の前を横切ろうとして、雑草の中に転がっているビア樽が目にとまった。そいつがビア樽の分際で酄をかいていることに気づいて、思わず足を止めた。

日はすでに、とつぷりと暮れていた。それでもかすかに消え残った光の底で、そいつは気持ちよさそうに、ふくれた腹を上下させているのだ。

「ヘンリー王じゃないか」

まさか本名とは思えないが、この界隈の連中は、だれもがそう呼んでいた。ビア樽のような巨漢にして、大酔漢。むしろぼくの名前は、こんな男にこそ相応しいのかもしれない。ともあれ、こいつとこんな所で行き逢ったのも、何かの縁かもしれない。

不安げに目をしばたたかせるロザリオに、ぼくは微笑みかけた。

「叩き起こしても損はないと思うんだ」

歩み寄れば、ビア樽を見下ろすかつこう。見事なまでに隙だらけで、剣は、かろうじて帯で腰に引っかけたまま、草の中にだらしなく投げ出されていた。ぼくの不安は、にわか増した。

ミワが弱まれば、人を見る目まで節穴になってしまふのだろうか。白髪混じりの髪は乱れ、鼯のリズムで口ひげがそよぐ。年寄りのようであり、案外若いのもかもしれない。そもそも、ヘンリー王と呼ばれるこの男の年齢はおるか、素性を知る者もこの界限にはおるまい。ただ一年ほど前から、いつのまにかズ・シ横丁に棲みつき、常に酔っ払っては、所構わず転がっていることを除けば。

「カゼをひくぜ、王様」

声をかけたが、まったく反応はない。つま先で軽く蹴ると、腹がぼこんと間抜けな音をたてた。口ひげが、生きもののようにつこめいた。

「カゼをひこうが、火を吹こうが、わしの勝手と知るがいい。例え王国をくれてやると言われたって、起きねえもんは起きねえんだ」
寝言にしては、王立劇場の役者のように朗々と響く声。それでも薄目すら開けず、たちまち鼯をかき始めるのだから、呆れる。ぼくは苦笑しつつ、身をかめてささやいた。

「あいにく、王国の持ち合わせはないんだ。百年以上前に、取りそこなったからね。そのかわり、酔い覚ましの酒ならご馳走してもいい」

かつ、とヘンリー王の目が見開かれた。酒臭い息が、炎のようにわき上がった。

「ならば、話は早え」

こいつ、まだ飲むつもりか。そう考えたときには、ビア樽がごろりと縦になり、膨れに膨れた腹が、ぼくの視界をふさいでいた。アダムの実をふたつぶら下げたような、ピカピカの赤い頬。ばかでか

いゲツプをひとつ吐き、まばらな齒をのぞかせて、ピア樽はニヤリと笑うのだ。

「天国へなら、喜んでご同行させていただくつもりだ、なあ兄弟」
ぼくたちは天国への道を急いだ。

ヘンリー王は、滑稽なほど長いマントをはためかせ、今にもずり落ちそうな剣を、革の鞘ごと街路に引きずりながら、それでも遅れをとらなかった。ふうふうと吐く息が夜空を焦がし、月をレードムの実の形に縮み上がらせた。青猫亭の前には、七人の男たちが転がっていた。

死体かと思い、つま先でつついてみると、ああとかうとか、借金取りに生返事するような呻き声をもらした。見れば、青猫亭の常連の中でも、腕っ節の強い連中ばかり。中には火のついた煙草をくわえたまま、伸びているやつもいた。

「よお、気が利くねえ」

ヘンリー王がパイプをもぎ取り、一服して、また男の口に戻した。店の中は、思ったほど荒れていなかった。テーブルと椅子がいくつか逆立ちしており、床には多少の料理や、割れた酒瓶がまき散らされていたが。要するに、表に転がっていた七人が、いとも簡単に放り出されたあと、他の客は皆、尻尾を巻いて逃げたのだ。

ヒゲ達磨は、カウンターの後ろで憮然と腕を組んでいた。まったくケガをしていないのは、最初から手を出さなかったからだろう。ぼくたちが入って来るのを見届けると、仏頂面のまま、店の奥へ目をやった。そこでは五匹の半鬼どもが、おいに飲み、かつ食っていた。

（前の三匹はザコだ。が、奥の二匹は少々、厄介だな。ほとんどゴブリン化している）

瞬時にぼくはそう判断した。

ユゴラ族を含め、半人半鬼のエルフは長く生きればそれだけ、人より鬼の要素が勝ってくる。奥の二匹は、少なくとも五百年は生きているのではあるまいか。強靱な筋肉を包む皮膚は、甲羅のように

角質化して、尖った突起を肩からいくつも生やしていた。かれらに比べれば、ヘンリー王の巨軀も見劣りするほどだ。

三日前、ぼくとダーゲルドが座っていた席に、その二匹は腰を据えている。残りの三匹は立ったまま飲み食いしていたが、ぼくが近づくと、おもむろに威嚇する調子で身構えた。

「あいにく、そこはぼくの席なんですね」

そう言うのと、人とも獣ともつかない声で、ちんぴらどもはわめいた。言葉の意味はさっぱりわからないが、失せやがれとか死にてえのかとか、そんなところだろう。

「もちろん、きみたちが相応の代金を支払っているのであれば、ぼくだって、席を譲ることにやぶさかではないさ。でも、もしそうでなければ、今すぐ席を空けてくれたまえ。とくに今夜は、友達とおおいに飲み、かつ語り明かすつもりなんだから。天国についてね」

片目を閉じてみせた。ばかにされたと思ったのか、三匹のちんぴらは床に皿を叩きつけ、きーきーと踊り上がった。長い舌が顎の下まで垂れ、大量の唾液が料理の残骸の上にあふれた。まったく、これから食事をしようという時に、食欲が減退するような光景を見せつけてくれる。

「言葉が難しすぎたのなら、もっとわかりやすく言っただけよ。ロム川の魚の餌にならなくなければ、とっとと失せな！」

4 (1)

4

三匹のザコを表に放り出すのは、たやすかった。もちろん、使鬼を呼び出すまでもない。ぼくはあらかじめ呪文を唱えて、風塊を発生させ、マントの下に隠していた。

案の定、ちんぴらどもは挑発に乗って、いつせいに飛びかかってきた。絵にかいたような単細胞。あとは闘竜士のように、マントをひるがえすだけでよく、三匹は勝手にスッ飛んで行ってくれた。今ごろは七人の常連たちと、仲良く転がっていることだろう。

「何かご意見は？」

ぼくは二匹のゴブリンに微笑みかけた。

よく椅子が潰れないものだ。腰かけている状態で、目の高さがぼくと変わらない。尖った耳。緑色の禿頭から突き出た、三本の角。黒革のぼろズボンだけを身につけ、アクセサリーなのか、それとも鎧がわりか、上半身に太い鎖を巻きつけていた。壁に目を遣ると、二本の巨大なハンマーが立てかけてある。これがかれらの得物なのだろう。

二匹とも、牙が食み出した唇に薄笑いを浮かべ、陰湿な細い目で、こちらを見据えている。その瞳は、金色の光をおびている。手下を瞬時に放り出されたにもかかわらず、いやに落ち着き払っているのが気に食わない。にわかに警戒心が増してゆく中、ようやく一匹が口を開いた。

「ぬしがフォルスタッフか」

これ以上ないほどのしゃがれ声。ひどく訛りながらも、共通語を話したところが意外であり、不気味でもあった。

「なるほどね。どこで聞いたのか知らないが、最初からぼくがお目当てだったのか」

「そぎやなやん。ぬしがこつつあ、ザ・ザが荒地の、向こうん方から来やった旅歌人から聞きやった。黄金の欲しかるぎやなやん。ぬしが首をば取ってさらって、お宮ぎやな持ってきよれば、黄金の蝶の舞うごつつ、黄金の蛇の這うごつつ、宝の村に溢るぎやなやん」
要するに、ぼくの首を王宮に売って黄金を持ち帰りたいと。

総じて、エルフや魔族は黄金や宝石に目がなかった。自然界の鉱脈は、たいていかれらが守っているし、また人の手によって抽出され、精製され、磨き上げられた貴金属は、かれらの垂涎的であるけれどそれで商売をする気など、さらさらないらしく、ひたすら集めて喜ぶだけ。時には、どんな手を使っても。

（刺客だったとはね）

単細胞の低地人と、舐めてかかったのがいけなかった。ひとたび狩におもむけば、かれらほど巧みなハンターはいない。酒場荒らしという餌に、ぼくはまんまと食いついてしまった。ザコを蹴散らしたことでいい気になって、かれらに近づきすぎた。

「はいほおおおおっ！」

奇声とともに椅子が振り上げられ、ぼくの頭上に高々とかがけられた。その一撃は、かろうじてかわしたものの、飛び散る木片の中、二匹めのゴブリンが振り上げた大ハンマーが、すでに面前にせまっていた。

やれやれ。

ミワの衰えとはみじめなものだ。一度は王国を滅ぼしかけた大魔法使いが、こんな場末の酒場で、低地人ごときに頭をぶち割られてお陀仏だなんて。しかしまあ、さんざん悪の限りを尽くしてきたのだから、これで正解なのかもしれない。ダーゲルドのように、じわじわと身を蝕まれてゆくよりは……

ぎん、と、金属どうしがぶつかる音が響き、火花が盛大に飛び散った。けれどもぼくの頭蓋骨は無事であり、火花も自身の目から散ったわけではなさそうだ。

「黄金が飲めるかよ。例えば王国じゅうの黄金をくれてやると言われ

たつて、わしは今飲んでえんだよ」

呆れたことにヘンリー王は、鞘ごと斜めに持ち上げた剣に片手を添えて、ゴブリンの巨体から渾身の力で降りおろされた大ハンマーを受け止めていた。反動で半鬼はひっくり返り、テーブルを粉碎しながら、床に叩きつけられた。

怒声を発しながら、もう一匹のゴブリンが、車輪のようにハンマーを振り回し始めた。柱が砕け、壁に穴が開き、店全体がぐらぐら揺れた。

「わしの店が、わしの店が！」

ヒゲ達磨の嘆きをよそに、無数の酒瓶が次々と打ち砕かれた。次にビア樽も同じ運命をたどるかと思われたが、信じられない身軽さで後ろに飛び退き、柄に手をかけて低く身構えた。半眼の底が銀色に輝くのを見た。その目は、草地に寝転がっていた隙だらけの酔っ払いとは、別人としか思えなかった。

「天国行きの竜車の切符を。なんてもったいねえ」

いまひとつ意味不明な決めゼリフとともに、剣が抜かれた。銀色の閃光が走り、何かがゴブリンの手を離れて、右と左の壁に、それぞれ大穴を開けた。それがまっぴたつに割られた大ハンマーだとわかるまで、少なくとも四回の瞬きが必要とした。

4 (2)

信じがたいことに、ハンマーの金属部分までが、奇麗に二分割されていたのだ。しかもかれの剣は、すでに鞘におさまっていた。

（これは！？）

噂にきく、イ・アイル流かもしれない。実際に目にするのは始めてだが、タジール公領のさらに東方で、少数民族が編みだした剣法と聞く。抜く瞬間に、物理法則を越えたパワーが生じるという。

その民族は、とつくの昔に滅びたらしい。ただ、ザートル・イーチルという名の盲目の達人が、旅を続けながら悪人をやつつける叙事詩が、吟遊詩人たちによって今に歌い継がれていた。

「先に抜いたのは、そっちだぜ」

大ハンマーに、抜いたも抜かぬもあるのだろうか。緑色の顔をさらに蒼ざめさせて、立ち尽くすゴブリンの後ろから、もう一匹が自身の得物を取りなおすのが見えた。ひとつだけわかっているのは、チャンスが今しかないことだった。

「ザル・ドワール・アム・ドミーム。偉大なる地底の支配者。暗黒の王の御名において、我は望み、我は求む。大地の精霊にして、コボルト族の守護神。ジェシカをここに召還せんことを」

左の手の甲を目の前にかざし、親指に嵌められた、金雀児色の指輪に口づけした。稲妻のように光がほとばしり、輪踊りする小人たちのシルエットを描くと、やがて一人の小柄な女の姿に凝縮された。ジェシカは大錠を腰のうしろにさしたまま、目の前に立っていた。背丈はぼくとかわらない。肩に触れるくらいの金色の髪は、麦藁のように跳ね放題。広い腰帯の下に、短い布を巻きつけているだけで野生児めいた、たくましい脚は二本とも剥き出し。片手で易々とハンマーを受け止めた姿勢で、ぼくを振り向いた。

「こんなものを、こんなところで振り回されては、亭主が哀れだろう。フォルスタッフ、あんたときたら、本当に気が利かない」

と、なかなかの人情派だが、ぼくにはつらく当たる。

「この喧嘩、あたしが買つていいよね」

ゴブリンどもをさし置いて、意味ありげにヘンリー王を眺めた。剣の柄から手を離し、かれはニヤリとまばらな歯を見せた。ゆつくりと店を出てゆくジェシカの、いかにも無防備な背中を、ゴブリンどもは指をくわえて見ていた。扉がぱたんと閉まる音で、ようやく我に返ったのか、二匹は足音を響かせて駆け出した。扉が粉々に碎け、ヒゲ達磨が悲鳴を上げた。

「その扉の彫り物！ 五万ダラントもしたんだぞ！」

月の光で、店の表は明るかった。

ゴブリンの一匹は相変わらず鉄槌を、もう一匹はどこで見つけたのか、ごつごつした棍棒を手にしていた。かれらに対峙するかつこうで、ジェシカは腰に手をあて、小首をかしげて、不敵な笑みを浮べていた。首を反対側へひねると、こきりと骨が鳴る。

こましゃくれた少女のようだど、ぼくは思う。胸当ての下に膨らみはほとんど感じられないが、あらわな臍から腰へかけてのラインは、南方の果実のように充実していた。すべてに均整のとれたミランダとはまた異なり、ジェシカには野の花のような趣きがある。自身の審美眼に満悦していると、彼女にギロリと睨まれた。

「またいやらしい目で見ているな。あとで覚えていろよ」

こんな体でなければ、弱点を責めてのたうちまわらせてやるのだが。角亀のように、首をすくめる以外なかった。

二匹のゴブリンは厭な感じの目配せを交わすと、一匹がもう一匹の後ろに隠れた。ジェシカとの距離は、中型の飛竜一頭ぶんくらいか。驚いたことに、同時に駆け出した一挙手一投足が、定規で測ったように揃っているのだ。おそらく彼女の目には、二本の得物を手にした、一匹のゴブリンに見えているだろう。

「はいほおおおおっ！」

おぞましい奇声が、月夜にこだまを返した。

ジェシカは腰を低くして身構えた。大鉈を抜こうともせず、その

まま掌を広げた右手を、前方に突き出した。すさまじい風塊が放たれ、先頭のゴブリンを直撃した……かに見えたが、粉碎されたのは残像に過ぎなかった。信じがたい身軽さで二匹は両脇に飛び退いており、それぞれの得物を振り上げると、頭上からジェシカを急襲した。

骨の碎けるような、厭な音が鳴り響いた。彼女はそのままゆつくりと、前のめりに倒れた。勝利に酔って、ゴブリンどもが腕を振りを上げた。

「はいほおおおおっ！」

「ジェシカ！」

駆け寄ろうとしたぼくの肩を、何者かが引きとめた。振り返ると、ヘンリー王が小刻みに首を振っていた。今さら再生の術などかけても無駄だ、というのか。いや、そうではない。かれの視線を追うと、麦藁のような髪を掻き毟りながら、ジェシカが起き上がるところだった。

「眠気覚ましには、ちょうどよかったな。ちょっとは遊んでくれな
いと、暴れ甲斐がないからねえ」

4 (3)

ゴブリンどもは、おおいに慌てた。

無理もない。大鎚と棍棒を、彼女の至近距離から、渾身の力で叩きつけたのだから。これ以上ないほどの、手応えも感じたろう。なにジェシカは薄笑いを浮べたまま、片目を閉じて、指一本で手招きしている。

「もう一度仕掛けてみないか？ うまくゆくかもよ」

二匹はそそくさと後ろに退き、距離を得たところで、再び前後に身構えた。意外な余裕が気になった。

例の奇声を合図に、ゴブリンどもは同時に地を蹴った。いったいどうなっているのか、今度は横から眺めているぼくの目にも、二匹の姿がぴったりと重なって見えた。ひとつの体から四本の腕が生え、四つの目をつけた、おぞましい怪物と化していた。しかもその体は、二倍に膨らんでいた。

ジェシカは身構えることなく、片手を腰にあてて立っていた。怪物の巨体が見る間に接近し、小柄な彼女に覆いかぶさる。四本の腕がすさまじい速さで振り回され、鉄槌と棍棒と拳で、彼女をめった打ちにした。生身の人間なら、拳の一撃だけで骨がばらばらに砕けたろう、強烈な打撃が無際限に降り注ぐ。

ようやく打撃がおさまり、ぐったりと伸びたジェシカの体が、高々と持ち上げられた。そのまま力を込めて投げ飛ばされると、叩きつけられた樹木の幹を、まっぴたつにへし折った。

うつ伏せに倒れた状態で、彼女は動かない。四本腕のゴブリンは慎重に歩み寄り、棍棒を捨てて、大ハンマーを頭上に振り上げた。ついに彼女の頭部が打ち砕かれるかと思ったとき、怪物はいとも簡単に引っくり返った。その足をつかんだまま、ジェシカが身を起した。

「勝負あったな」

ヘンリー王に言われるまでもない。最初から勝負にならなかったのだ。

ゴブリンの両脚を、自身の両脇にたばさみ、ジェシカはさも楽しそうに、ぐるぐると回し始めた。

「はいほおおおおつ、なんてな！」

ジェシカの高笑いが夜空をつんざいた。鬼だ。いや、鬼には違いないのだが、なんてえげつないやつだ。わざと先に打たせておいてお次に自身が屠る快楽を最大限に引き出そうというのだろう。こうなると、むなしく腕を振り回しているかれらが、哀れに思えてくる。さんざんぶん回したあげく、彼女は不意に、そして無慈悲にゴブリンの足を解放した。月の下にごちゃごちゃと積み重なるズ・シ横丁の屋根を越えて、ゴブリンの巨体は、飛竜のようにすっ飛んで行った。例え話ではなく、本当にロム川に叩き込まれたに違いない。

ただ、大蛇をついに用いなかったところが、人情派ジェシカの面目躍如たるところか。ミランダなら迷わず炎の剣をふるい、ロースト・ゴブリンにしていただろう。

「ウォーミングアップは、こんなところだな」

と、不吉な文句をつぶやいて、ジェシカはギロリとぼくを眺めた。「もう用は済んだ。さっさと指輪に戻るんだ。さもないと……」

「どうしようって言うのさ」

舌なめずりするさまに、背筋が寒くなった。タチのよくないことに、こいつは与えられる懲罰を、どこか喜んでいるフシがあった。ぼくに言われたくはないだろうけど、変態である。まして衰えたミワで締めつけようとしても、ぬるま湯くらいにしか感じまい。むしろ手ぬるいのが不満だからと、反抗してくるタイプだ。

ある意味、このての被虐趣味者が、最も扱いにくい。

「そろそろ潮時じゃないのかい、フォルスタッフ。ミランダ姐さんにこんがり焼かれるよりは、あたしに首の骨を折られたほうが、まだ楽に死ねるよ」

「新しいご主人さまでも探すつもりか？」

「どうだか。ま、しばらくは自由の身を満喫するさ。あんたのことはそんなに嫌いじゃなかったけど、掟は掟。優しいあたしに屠られるのを果報と思って、覚悟するがいいさ」

とまあ、予想どおりの展開である。

ぼくは後退りつつ、そこに立っているはずのヘンリー王に目をやった。けれどもかれは、すでに一個のビア樽に戻って、地面に転がっていた。もちろん、蹴飛ばしたくらいで簡単に止まる筈ではない。絶望のあまり眩暈を覚えたとき、大きな酒の瓶を胸に抱いて、戸口から駆け出してくるロザリオの姿が、目に飛びこんできた。じつに機転が効く、いい娘だ。ぼくがこんな汚れた身でなければ、ぜひ嫁にもらいたかった。けなげにも彼女は、息を弾ませてこう叫んだ。「フォルスタッフさん、ひとつだけ無事でした。早く、これをそのお方に！」

5 (1)

5

効果はてきめんにあらわれた。

酒のにおいを嗅いだたん、ヘンリー王はひくひくと鼻梁を蠢かせ、むっくりと上体を起こした。赤子でも抱くように瓶を受け取ると、頬ずりし、大きく傾け、咽を鳴らして飲み込んだ。最後の一滴が、きらきらと月光を浴びながら、酔漢の口の中に消えた。

ダーゲルドでさえ、すべて飲み干しはしなかったのに。ぼくは別の意味で、不安になってきた。

右に左によるめきながら、ヘンリー王は立ち上がった。二本の足で巨体を支えているのが、奇跡のようだった。燃えるような息を吐きながら、酔漢は前へ進んだ。断続的にもれるゲップ。血走った目は半眼で、やはり鞘に収めたままの剣先を、街路に引きずっていた。隣に並んだところで、肩を叩かれた。恐るべき酒臭さ。

「よお、兄弟。こいつはじつに素晴らしいねえ。天国だねえ、ちくしょうめ。天国への階段が見えるってもんだ」

と、完全無欠のぐでんぐでん。ジェシカの声が響いた。

「イ・アイルの使い手か。ふん、あんたの悪運の強さには、いつもながら呆れるよ」

見れば意外なことに、彼女は腰の大鉈を外し、左手に引っさげていた。長い付き合いになるが、ジェシカが一人の人間を相手に鉈を抜いたのは、今夜が初めてかもしれない。

ヘンリー王はよろよると足を踏み出し、柄に手をかけた。常に上体は揺れているが、腰から下はまったく動かないのだ。

「お前さんには、何の恨みもねえが、やくざな渡世だ。ごめんなすつてとっておく」

「あたしも先に忠告しておくけど、手加減はしないよ」

だめだ、と思った。

たしかにばくは平素からこの酔漢を、腕の立つ男だと認めていた。だらしない仕草で包み隠そうとしても、隠しきれない鋭利さが垣間見えたからだ。しかし、どんな達人であれ、剣術使いが使鬼とまともにやりあつて、勝てるわけがない。しかも自慢ではないが、力でジェシカを上回る使鬼など、まず思いつかない。

もしヘンリー王に勝ち目があるとすれば、相手が油断している場合に限る。ふらふらと攻撃をかわしながら、隙に乗じて仕留めるといふ、これも東方伝来の酔いどれ拳法と同じカラクリだ。最初からネタがばれているのでは、お話にならない。

しかもジェシカは、先のゴブリン戦で、充分ヒートアップしていた。鉄を叩いて鍛えるように、わざと叩きのめされた肉体は、金属の鎧よりも強靱になっていくはずだ。

こうなつては、もうだれにも止められない。日頃はのんびり屋の彼女だが、ひとたびヒートアップすれば、好戦的な修羅としての本性が剥きだしになる。スマートなミランダやヴィオラより、よほどタチがよくない。文字どおり敵を血祭りにあげるまで、暴走し続けるだろう。

むろん、最後に血を絞り尽くされるのは、ぼくなのだ。

「覚悟しな、ピア樽！」

ぎくりとしたが、その言葉はぼくではなく、ヘンリー王に投げかけられたもの。たちまち薙ぎ払われた大鎧を、酔漢はわずかに抜いた刀身で、がっちり受けとめた。世界をつんざく音が響き、銀色の火花が散った。

「はあああああつ！」

ジェシカは鎧を返しながら後ろに飛び退き、すかさず踏み込んできたヘンリー王の一撃を浴びた。逆手にかかげた一刀を、足を開いて踏ん張り、両手で鎧をかつぐ恰好で、かろうじて受けとめたのだ。よほど手が痺れたのか、彼女は眉間に苦悶の皺を寄せた。対して、大酔漢は半眼のまま、口ひげの下に笑みすら浮べていた。

両者は同時に飛び退いた。ジェシカが鉈を構えなおし、ヘンリー王は再び剣を革の鞘におさめた。両者の間に、究極まで張りつめた弦のように、殺気の糸が張られていた。

「やるじゃないか」

「お前さんこそ」

「だけど次は、本当のピア樽になつてもらふよ」

ぺろりと凄惨な舌なめずりをして、ジェシカが踏み込んだ。鬼の臂力で、次々と打ち込まれる大鉈を、ピア樽、いやヘンリー王は、逆手にかざした剣の根もとで、軽やかに受けとめてゆく。酔っ払いのだらしなく肥えた体に、鬼神が乗り移っていると思えなかった。

と、意想外の善戦に思わず見入ってしまったが、このまま放っておくわけにもいかない。生身の人間の体力には限りがあるが、使鬼はダメージを受けない以上、無限の攻撃力をもつ。

「ヘンリー王、加勢する！」

そう叫んで飛び出したものの、今のぼくに何ができる？ 援護のつもりで、なまじ火弾など撃ち込んだところで、効かないどころか、かえってジェシカに油を注ぎ、ヘンリー王の集中力を削ぐだけではないか。ならばやはり、別の使鬼を呼び出すしかないのか。

うなりながら左手の甲をかざした。赤、紫、青……と、人さし指で一本ずつ触れてゆき、小指に嵌めた緑色の指輪の上で逡巡した。

（ハーミアか……）

こいつはヴィオラに次いで気難しい、扱いにくい女だ。

理屈屋で、癪症が強く、気位が高い。まああの二つは、ヘレナ意外は皆そうなのだが。ただ、ジェシカを封じるにはうってつけで、風の精霊であり、また植物を自在に操る彼女は、地霊であるジェシカのエナジーを、たちまち吸い取ってしまうだろう。植物は地力を奪うという理屈だ。

問題は、呼び出したはよいが、彼女が言うことを聞くかどうかである。ぼくは再びうなりながら、戦況に目を転じた。

ジェシカとヘンリー王は、対峙したまま睨み合っていた。酔漢の剣はまた鞘におさめられ、次に抜かれる瞬間を待つて、力をためているのだろう。ジェシカは片手を添えつつ、大鎧を高々と頭上にかざしていた。十割本気の構えではないか。ヘンリー王がつぶやいた。

「加勢は無用だなあ、フォルスタツフ殿」

「しかし……」

「なに、次で決着がつくさ。ほかの姉ちゃんを呼び出すんなら、それからでも遅くねえだろう」

勝てる気がしない。

幻のイ・アイル流の達人とはいえ、次は全力で打ち込まれるであろう大鉦に、太刀打ちできるとは思えない。それこそピア樽どころか、薪のように断ち割られて終わりではないか。

「あんたこそ、無駄死には無用というものだ。いったい、ぼくのために命を落とす義理が、どこにある？」

「まだ死ぬと決まったわけじゃあるめえ」

しゃっくりをひとつして、まばらな歯を覗かせた。月光を浴びて、まがましい祭具のように、大鉦が輝いた。じりじりと、わずかずつ間合いが詰められてゆく。

今度ばかりは、ジェシカもつかつに打って出ようとしなない。抜く瞬間に最大の力を得る、イ・アイル流の特徴を、よく見抜いている。賢い娘だ。力任せに暴走するばかりが、取り柄ではない。それゆえに、手強い。

「やめたよ」

ずん、と地面に大鉦が突き立てられた。ジェシカは頭の後ろで指を組み、あらぬ方を向いていた。隙だらけの姿勢であり、降参の意思表示だ。もちろん、ぼくは驚いた。

「なぜ？」

「言っておくけど、この剣術使いを侮辱したんじゃないよ。あたしの負けなら、負けでいいってことさ」

「でも、なぜ？」

「あんたもしつこいね、フォルスタッフ。苦手なんだよ、捨て身でかかってくるやつがさ。あたしとわたり合つてるとき、こいつはすでに生きちゃいないんだよ。死を覚悟してるとか、そんなレベルじゃない。とつくに死んでるんだ。とつくに死んでる男を、どうやって殺すのさ？ だからあたしの負けってことで、吟遊詩人に言い触らしたって、文句は言わないよ」

王侯貴族から巷のあやしげな剣術使いまで、不名誉な事実を吟遊詩人に歌われることを、ひどくいやがる。かれらに歌われたが最後、

いくつもの荒地を越えて、その事件が人々の耳に伝わるし、また長い年月を経れば、伝説として定着してしまうからだ。

呆氣にとられながらも、ぼくは精霊封じの呪文を唱えた。ジェシカはまったく抵抗を示さず、大蛇の柄尻の上で指を組み、顎をのせていた。間もなく彼女の全身は武器ごと、光の荒い粒に解体され、黄金色に輝きながら、指輪の中に吸われていった。気が抜けたとたんに、眩暈をおぼえて、ぼくは片膝をついた。

小指に嵌めた、緑色の指輪が異様な輝きを放っていた。どこからともなく、風がわき起こり、吹きすさぶ音に混じって、女の笑い声が響いた。

「惜しかったですね。呼び出してさえいただけたら、ビア樽どうし、仲よく屠ってさしあげたのに。わたくしはジェシカほど、甘くなくってよ」

風の中、石畳を割ってイバラが伸び、足にからみついた。棘が肌に食い入るまま、イバラはさらにぼくの胸を、腕を締めつけてくる。「やめろ、ハーミア！」

力を絞ってミワを張ると、イバラがちぎれ、風がおさまった。気がつけば、ヘンリー王はすでに一個のビア樽と化して街路に横たわり、高軀をかいていた。

ぼくはヘレナを呼び出した。

彼女は水妖である。

長い髪は黒い流れのように、ほっそりと引きしまった肩に、背になびいていた。つぶらな瞳は黒く、それは髪同様、光の加減によっては紺碧の輝きをおびた。亜麻色の布を、つつましやかに身にまとい、装身具といえば、手首の細いリングと、やはり細い銀色の髪飾りくらいなものだった。

火妖であるミランダと並べれば、一對の絵ができあがるだろう。お互いに美しい髪をなびかせ、片方は豊かな肉体を誇らしげに燃え上がらせているのに対し、彼女のほうは、ひかえめな、けれど均整のとれた体を、しっとりと潤わせていた。

どちらかという点小柄であるが、ジェシカほどではない。それでもなぜか彼女は、そのことを苦にしているらしく、「小さい」と言われることを、非情にいやがった。彼女の前で、この一言は禁句なのである。

人魚にせよウンディーネにせよ、娘の姿をもつ水妖が総じておとなしいように、彼女もまた穏やかな性格の持ちぬしだった。水がなければ、人は生きられない。それどころか、あらゆる生きものの源といえるだろう。人は水辺に町を作り、雨の恵みをうけて耕作するけれど、ひとたび手におえなくなると、水ほど恐ろしいものはない。火には限りがあるけれど、水は無限ともいえる圧倒的な質量で襲いかかる。これほどまでに温厚なヘレナでさえ、そんな水の性質を有していることに違いはない。

もしも本当にヘレナを敵にまわせば、ミランダより恐ろしい相手となるだろう。

だから彼女を呼び出すときは、ぼくもかなり悩んだ。悩み抜いた末に呼び出すことにしたのは、ハーミアの宣戦布告に肩を押された恰好である。

ハーミアとヘレナは、姉妹のような関係にあった。ハーミアは風の精であり、また植物をもつかさどる。風と植物が、水と深い関係にあるのは、言うまでもない。何かと気難しいハーミアであるが、ヘレナにだけは頭が上がらない傾向にある。水を断たれば、植物が枯れてしまうように。

「ジェシカはまだ中立とみていいかもしれない。けれど、ミランダとハーミアは、もはやあからさまに敵意を示している」

耳の長い巨獣が地下に眠るといって、古代神殿の廃墟である。数日前にダーゲルドと対面したところ。もうすぐぼくのミワが尽き、使鬼たちに滅ぼされるであろうことを宣告された丘に、今日はまだ朝のうちにのぼったのだ。新しい日の光が、彼女の黒髪を紺碧に輝かせるように。

丘を覆う草は、まだ露をしっとりと宿していた。きらめく草地にヘレナは腰をおろし、みずからの髪を掌にためては、さらさらと滑り落ちるにまかせた。

「わたくしも、お味方のままでいるとは限りませんでしょう」

「わかつている」

「それでもお呼びになったのは、なぜですか」

ぼくはぎくりとした。やはりヘレナも変調をきたし始めている。ぼくをこまらせるような質問を、ぶつけてくる女ではなかった。

魔方陣を描くことも、もちろん考えた。危険な精霊、とくにデモンを呼び出すときに用いるやり方だ。魔方陣の中に召喚し、封じ込めることで、こちらに危害が及ばないようにする。もちろん易々と結界を破られる場合もあるが、少なくともそのまま呼び出すよりは安全だ。

ミワの衰えた現在のぼくは、丸腰に等しい。ヘレナといえども一匹の使鬼に過ぎないことは、重々承知している。それでも魔方陣を

描かず、またヘンリー王を同席させなかったのは、なぜか……ぼくは自嘲的に微笑んだ。

「感傷だよ。きっと、それ以外の何ものでもない」

かつては平時にも、ヘレナとともにいたことがあった。もっとも、いつ敵に襲撃されるかわからないといった、理由をつけた上でだが、ヴィオラをシザリーオと呼んで召し使っていたという、ダーゲルドとおそらくは同じ気持ちで。

きつと、そんな感傷の名残りなのだ。

「わたくしに、何をお望みですか」

「とくに考えていなかった。もちろん、おまえに泣きついて守ってもらいたいという、下心はおおいにあったさ。ただ呼び出したとたん、おまが襲いかかってくるのなら、それはそれでよかったんだ」

「わたくしに命を奪われても？」

「少なくともハーミアよりは、優しく殺してくれそうだからね」

眼下に横たわる街のいたるところで、水路がきらめいていた。お世辞にも美しくないズ・シ横丁の、積み重なる屋根たちさえ、祝福を浴びているような朝だった。

彼女が悪鬼でなければ……ふとそんな考えが、頭をよぎった。ぼくたちもまた、祝福されたのだろうか。永遠に。永遠なんて、存在しないとわかつているのに。

「朝は苦手ではなかったのですか、ご主人さま」

くすりと肩をすくめて、彼女は黒い瞳を向けた。ぼくをまだ主人と呼んでくれたことが、やっぱりうれしかった。

「最近ね、闇のほうが悪く感じる時がある。闇の力を得てこそ、この肉体を保っているぼくなのね。横丁には月や星の光がささず、灯火もまったく届かない一角が多いけれど、そんなところに入り込んだりするとね、食べられてしまいそうな気がするんだ」

「食べられる、のですか？」

「ああ。闇そのものに呑みこまれ、永久に出られなくなりそうな。限らない無の中に、閉じ籠められてしまいそう。実際に、闇が質量を得てぼくに纏いつき、手放すまいとする意志みたいなものさえ感じる。あれほど大嫌いだった朝の陽光に、いつのまにか救いを求めている自分に気づく」

「夢はご覧になりますか」

ぼくは口ごもった。言われてみれば、最近また、ヴィオラの夢を見るようになっていた。まるで彼女を目の前に呼び出しているような、生々しい錯覚とともに、目覚めることさえあった。

途絶えた会話の糸口を探すように、草の中に視線をさまよわせた。天人や怪物のレリーフを宿したままの、神殿のカケラが散らばっていた。一輪だけ咲いている赤い薔薇が、思いがけない鮮やかさで、目に飛びこんできた。

「ダーゲルドが訪ねてきたことは、知っているね」

「存じております」

指輪の中に封印されてる間も、使鬼たちは完全に眠っているわけではない。個性にもより、例えばジェシカなどは本当に熟睡している場合が多いし、ミランダは戦闘以外には基本的に無関心だが、ヘレナは多くの日常をよく観察していた。ダーゲルドとの間に交わされた会話も、耳を澄ませてすべて聞いていたのだろう。もちろん、それを責めるつもりはない。

「どう思う？」

「善鬼とミワを結ばれることについて、ですか」

「そうなれば、いずれはおまえも、善鬼と闘わなければならない」

光の存在、善鬼が彼女たち悪鬼の文字どおりの天敵であることは、言を待たない。光は闇を駆逐する。ただもちろん善鬼にもレベルがあり、たいていの光なら、彼女たちの闇に陵駕されてしまう。けれどもダーゲルドは、闇の中の闇、ヴィオラをもそれに駆逐させようというのだ。よほど強力なエナジーと、結びつけるつもりなのだろう。

ヘレナは指を光にかざした。光のささない水底のように、彼女もまた、はかり知れない闇を自身の内に秘めていることが、信じがたかった。

「それが運命なら、受け入れたいと思いますわ」

「精霊にも、運命という概念があるのか。束縛しておいて、こんなことを言うのはおかしいけれど」

「わたくし自身の力ではどうにもならないもの、それが運命なのでしょう。あるいは、わたくしの意志であるように見えても、実際にはそうでないものが。例えば……」

「たとえば？」

「使鬼の掟とか」

術を破られた術者は、おのれが放った使鬼に食い殺されなければならぬのも掟。ミワが弱まったとき、おのれの使鬼と闘わなければ

ばならないのも、また掟。それを運命と呼び、逆らえないなら従おうという。優しい彼女の、これは彼女らしい宣戦布告なのかもしれない。ヘレナは語を継いだ。

「ただし、わたくしにも意志というものがございます。運命の力に抗し得る限りは、わたくしはご主人さまを守ってさしあげます」

「ミランダやハーミアと闘うことになっても？」

「はい」

「たとえば、善鬼とミワを結んだとしても？」

「運命に抗し得る限りは」

後ろからヘレナの肩を抱いた。その肌はひんやりとして、濡れた石のように滑らかだった。強く抱けば折れてしまいそうなほど、華奢な体。その奥に秘められた闇までも、ぼくは抱きしめようと焦った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1464z/>

六番めの善鬼

2012年1月5日23時48分発行